

戦争とは何だろうか。国を護るためのものなのか。ただ利益を得るためのもののだろうか。そんな問いを私に与えてくれたのは、この本の主人公である宮部久蔵だった。

この物語は、太平洋戦争を舞台にしている。その時代に生きた人々の生き方を描くと同時に、宮部久蔵を始めとする国のために戦ってきた人の心境を痛切に描いている。私は本屋で何気なく手に取ったこの本の重みを読み進めていくうちに感じていった。

私はこの本を手にとった時、主人公は勇敢で男らしい人なのだと思っていた。だから読み進めていくうちに分かってきた実際の人物像と想像していた人物像の違いに戸惑っていた。実際は、「死にたくない。」と言い続けた臆病ものだったのだ。

でも、その言葉の裏にあったのは、娘と妻に会うために死にたくないと思う一人の父親がいたことを知り、私は胸をしめつけられた。そして、私はこの話を祖母に話した。すると祖母は真剣な顔をして、私に話を聞くように言った。胸を刺されたような衝撃を受けた。このような話だった。

祖母の父は太平洋戦争に出兵し、命がけで戦い、そして何とか帰って来たそうだった。しかし、病に冒されていた祖母の父は、まもなく息を引き取ったそうだった。祖母の父が息を引き取る前、祖母にこう言ったそうだった。「マサ子、会えてよかった。」と。幼かった祖母が今でも覚えていたほど胸に残っているらしい。

戦争を殆ど知らない私には想像できず、ただ驚くばかりだった。そして驚いている私に、祖母は追い打ちをかけるように、こう言った。「父はね、生まれたばかりの弟を見られずに死んだのよ。」と。祖母の父が戦地に行っている時に生まれた祖母の弟が、父の帰りを待つことなく亡くなってしまったらしい。自分の子供を見られないで死んでいくのは、言葉で言い表せない辛さだったと思う。

その辛さを経験したのは、宮部さんもだった。自分の子供に会うために生き延びようとしていたが、それは叶わなかった。何とか生きて帰ろうとしていたが、その頃の戦いは一秒油断しただけでも命を落としかねない絶体絶命の状態だったのだ。その中で生き抜こうとする彼の存在は、奇異な存在だったと思う。それでも私は、何とか生き抜いてほしい、子供や妻に会ってほしい、と読みながら心の中でエールを送っていた。

しかし、彼は天才でありながらも、臆病者でありながらも、一人の人間だった。同期や後輩が自分より先に死んでいくのは辛かったと思う。家族に会いたい一方で、自分だけが生き残っているのは複雑だったと思う。

その中で、彼も命を落としてしまった。自分から「特攻」という生きては帰って来ら

れないだろう役に立候補したのだ。機体などに不備が現れた時は、そのまま敵に突っ込んでいく恐ろしい役に、なぜ名乗りをあげたのだろう。家族に会いたかったのではなかったのか。私は、いくつもの疑問が浮かんできた。悔しくも亡くなってしまうのは、まだ納得できるが、自分から死に行くのは、正直おかしいと思った。だから、宮部さんが亡くなったことが分かった途端、体が金縛りになったように動かなくなつた。

一方で、少しずつだが、特攻に志願した本当の理由が分かってきた。気がついたら、涙が頬をつたっていた。あまりにも悲しすぎる。なぜなら、彼にはまだ生き残るチャンスがあったのだ。でも、そのチャンスを自ら捨てた。自分が助かれば、誰かが死んでしまう。だから、生き残るチャンスを後輩にゆずったのだ。そして、もし生き残れたら妻と子供をたのむと、彼に言い残した。「絶対にあきらめるな。何としても生き残れ」と。

宮部さんは、彼が生き残り、家族を救うことを予想していたのだろうか。自分が救ってあげようとはしなかったのだろうか。私には理解できない。

私は、宮部さんが生き残り、家族と幸せになつてほしかった。

宮部さんは、臆病者だと皆に言われていたが、実際は全くちがう。愛する者のために生にこだわり、尊厳と愛を貫いた宮部さんは、勇敢な男だった。読んでいる私の心が洗われたようになるほど、純粋な人だと思う。

そして、現在、いじめがある社会を宮部久蔵の勇敢な行動と比べると、どうなるだろうか。彼がとつた行動よりも優れた社会だろうか。私は、そうは思わない。だから、彼の行動を模範とし、現在の社会を見つめていく必要があると思う。それを彼は私達に気づかせてくれた。また同時に、戦争の恐ろしさを私達に教えてくれた。

今年、戦後七十周年を迎えた日本は、残念ながら戦争についての知識が風化していき、だからこそ、この「永遠の0」が皆に読み継がれ、二度と戦争を起こしてはならないと胸に誓わせる本であつてほしいと強く思う。

図書名 永遠の0

著者名 百田 尚樹